

元豊八年（一〇八五）五十歳四月）常州に在つての作。

漁父は漁夫。ここは詞牌の名。詞牌の名はふつうにはただ曲調を示すにすぎないのが、この詞は事実漁父のことをうたっている。しかしこの詞のはじめ二首は、清の内府に蔵されていた東坡の真跡がみられ（三希堂法帖）、それには漁父破子と題している。つまり詞と認めてよいのではあるが、この曲調、すなわち一闋（詞の一首）五句、三三六七六で、第二・三・五句、に押韻する、という詞形は詞律にもみえず、東坡の自度曲（歌曲も作詞者が作ったもの）であろう、と清の朱孝蔵はその編になる東坡樂府に注している。

漁父 四首

※みな前首を承けてうたいはじめる。

其一

漁父飲 誰家去
魚蟹一時分付
酒無多少醉爲期
彼此不論錢數

ぎよほ 漁父は飲む 誰が家にか去く
ぎよかいいちじ 魚蟹一時に分付す
きは多少と無く酔ふを期と為す
ひしせん 彼此錢の数を論ぜず

其二

漁父醉 蓑衣舞
醉裏却尋歸路
輕舟短棹任橫斜
醒後不知何處

漁父は酔へり 蓑衣にて舞ふ
酔ひの裏に却つて歸路を尋ぬ
たんとう おうしや 輕舟 短棹 横斜するに任せ
さめ 醒し後は何れの処なるか知らず

其三

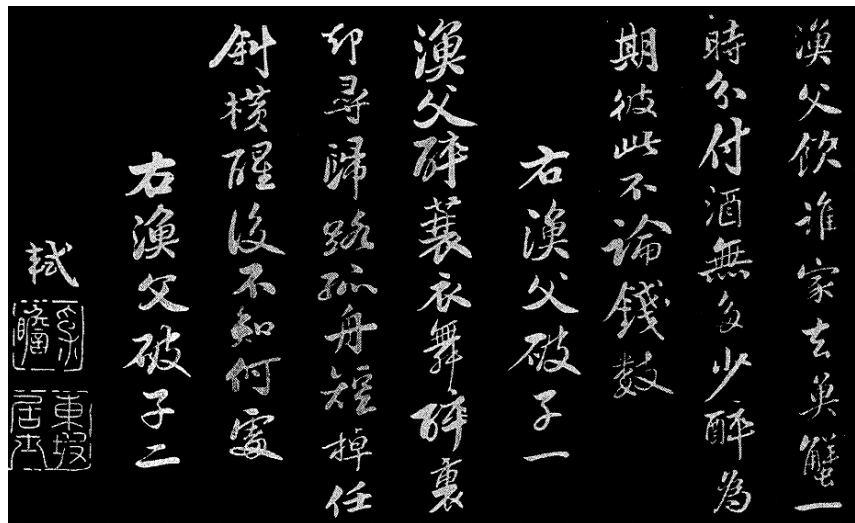
漁父醒 春江午
夢斷落花飛絮
酒醒還醉醉還醒
一笑人間今古

漁父は醒む 春江の午
夢断えて落花 飛絮
酒醒めて還た酔ひ酔ひて還た醒む
いっしょう じんかん こんこ 一笑す人間の今古

其四

漁父笑 輕鷗舉
漠漠一江風雨
江邊騎馬是官人
借我孤舟南渡

漁父は笑ふ 輕鷗拳がる
ばくばく 漠々たり一江の風雨
きば 江辺の騎馬是れ官人
こしゅう 我が孤舟を借りて南に渡る



漁父二首 蘇軾真筆 中国詩人選集 蘇軾下より

【語釈】○漁父：漁夫。父は老人の称。屈原に漁父辞がある。隠者を象徴する。

○一時：いちどきに、にわか。口語。○分付：分けあたえる。口語的なことば。

○無多少：多いか少ないかを無視するということ。史記の項羽本紀に「天の秦を亡すは、愚智と無く皆之を知れり」○酔為期：南史の陶潜伝に「酒を置いて之を招くもの或れば、造りて飲みて輒すなわち尽し、期は必ず酔ふに在り」○不論錢數：価を気にかけぬこと。○却い：前に述べられたことから予期される帰結（ここでは帰る路がわからなくなる）とは違った結果となることを示す。○尋歸路：桃花源記に「向に誌せし所を尋ねしも、遂に迷つて復た路を得ず」○任横斜：舟が水流に対して横になったり斜めになったりすること。任はそういう状態に放任する、まかせること。○漁父醒：白居易の詩に「酒は醒む夜深けて後、睡足る日高き時」○酒醒還醉：白居易の醉吟先生伝に「又数盃を引き、兀然として酔ひ、既にして酔ひて復た醒め、醒めて復た吟じ、吟じて復た飲み、飲みて復た酔ふ」○漠漠：ひろびろとしてはてしないさま。王維の輞川積雨の詩に「漠漠たる水田白鷺飛び、陰陰たる夏木黄鸝囀る」○一江：江一面。こういう一はある空間いっぱいになにかの状態がおおうさまをあらわす。○官人：官吏。

【通釈】

其一 酒を飲みに行く漁夫…。どんなお店へ行くのやら。どきっと投げ出す魚とかに。酒の量など決めてない。ただ心地よく酔いたいだけ。酒と魚の取り替えて、酒代などは問題外。

其二 ほろ酔いきげんの漁夫…。みのかさつけて舞をまう。酔い心地でたどる帰りの水路、小舟にさす短いさお、舟が横に曲がろうとままよ。目を覚ました時にはどこにいるやら。

其三 目を覚ました漁夫…。春の江の屋下がり。夢路断えてみれば散る花と飛ぶ柳絮の中。目覚めてはまどろみ、まどろんではまた目覚める。人間世界の今昔なんど、思うだけでもおかしくなる。

其四 笑う漁夫…。軽やかに浮かぶかもめ。はてしなき江のおも一面に、風雨おおう。江のほとり、馬にまたがっておいでなのはお役人、わしが舟で南へ渡してくれと言うんじやろう。

【参考】漁父と題する詞は唐の張志和や戴復古にある。ここに南唐後主李煜の作の漁父詞を比較のためにあげておく。

浪花有意千重雪 浪花は意有り千重の雪

桃花無言一隊春 桃花は言無し一隊の春

一壺酒 一壺の酒

一竿綸 一竿の綸

世上如儂有幾人 世上に儂の如き幾人か有る